年表（上巻）

豊津町史　年表

西暦	和暦	郷土のできごと	日本史のできごとなど参考事項
旧石器時代	五〇万年前頃		このころ日本列島に人（原人）が住み始める（上高森遺跡・宮城県）
	一三〇〇〇年前頃		福井洞穴（長崎県吉井町）、泉福寺洞穴（佐世保市）で細石器群と土器出土
縄文時代（早期）	一一〇〇〇年前頃	長養池周辺に人が住む（ナイフ形石器出土）	この頃、気候が温暖になり、海面が上昇して朝鮮・対馬海峡の陸橋がなくなる
	七〇〇〇年前頃	寺門遺跡（犀川町木井馬場）・自在丸遺跡（犀川町上高屋）に人が住む	縄文土器の製作が始まる このころ押型文土器が西日本に広く分布する
縄文時代（後期）	三五〇〇年前頃	節丸西遺跡に人が住み、集落を作る	弓矢と犬による狩りが始まる

弥生時代				
(晩期)	(中期)	(前期)		(晩期)
紀元前後	前一〇〇年頃	前一五〇年頃		前四〇〇年頃
		矢留遺跡（八景山南山麓）に住居が営まれ始める 犀川小学校校庭遺跡（犀川町）に集落ができる 竹並遺跡（行橋市）に住居が営まれ始める 下稗田・前田（行橋市）の丘陵に大集落が営まれ、箱式石棺・甕棺・土壙墓群も形成される		浄土院遺跡（苅田町浄土院）・黒田遺跡（勝山町上黒田）に人が住む 長井浜周辺に人が住む （板付Ⅰ式土器・夜臼式土器、箱式石棺・甕棺群出土）
円形や方形の竪穴住居がみられ、石囲炉や地床炉をもうける 朝鮮半島から水田稲作が伝来し、北九州に定着 「板付遺跡（福岡県）、菜畑遺跡（佐賀県）」 太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石庖丁・磨製石鏃、石剣などの大陸系磨製石器と木製農具の出現 弥生土器の製作が始まる 墓に朝鮮製の銅剣・銅矛・銅戈や多紐細文鏡を副葬する風習が始まる 共同墓地を構成する甕棺・石棺の特定のものに青銅器（前漢鏡・銅剣・銅矛）を副葬 倭は百余国に分かれ（漢書地理志）、楽浪と交渉するものがあ				

弥生時代			
二三九	一八四	一〇七	五七
（後期）			
川ノ上遺跡に墳丘墓など墳墓群がつくられる （後漢・三国時代の舶載鏡・仿製鏡・鉄器などが出土） 平遺跡（箱式石棺・上坂）より夔鳳鏡片、鉄鏃が出土			
倭国大いに乱れる（魏志倭人伝） 耶馬台国女王卑弥呼が魏に使者を送り、「親魏倭王」に叙せられ、金印を授けられる（『魏志』倭人伝）		倭面土国王帥升らが、後漢の安帝に謁見を願う（後漢書東夷伝）	北九州に末盧国（唐津平野）・伊都国（糸島平野）・奴国（福岡平野）などが出現する 倭奴国が後漢に朝貢して、光武帝より印綬を受ける（後漢書東夷伝） った

三〇〇			
代	このころ竹並（行橋市）に一・二号墳がつくられる（一号は方墳・二号は方形周溝墓） 石塚山古墳（前方後円墳・苅田町）が築造される 赤塚古墳（前方後円墳・宇佐市）が築造される		西日本の各地に大きな墳丘をもつ首長墓がつくられる 大和政権の成立期
三九一			地方首長が大和の連合政権に組み込まれ、首長墓が前方後円墳に画一化される 倭国、朝鮮に出兵（高句麗広開土王碑文）
時四二一			倭王讃（仁徳天皇か）、宋に朝貢する（宋書倭国伝）
古墳（前期）	琵琶隈古墳（行橋市）が築造される 居屋敷（徳永）に須恵器窯がつくられる 御所山古墳（前方後円墳・苅田町）が築造される 石並古墳（帆立貝式前方後円墳・行橋市）が築造される 稲童二一号墳（円墳・行橋市）が築造される		横穴式石室が出現する（大陸墓制の影響） 竪穴系横口式古墳がみられる 臣・連・君・直などの原初的カバネがすでにつくられ、官制としてのトモの制度も成立してい

時代	古墳時代		
四七八	五二七～五二八	五三六	五三八
（前期）		（中期）	
	継体二一	宣化元	宣化三
このころから北垣（節丸）に古墳群が築造される 番塚古墳（前方後円墳・苅田町）が築造される	徳永川ノ上遺跡に古墳群が築造され始める 肝等屯倉（苅田町）が設置される		箕田丸山古墳（前方後円墳・勝山町）が築造される 庄屋塚古墳（前方後円墳・勝山町）が築造される
たらしい 倭王武（雄略）、宋に遣使し、上表する（宋書倭国伝）	筑紫磐井の反乱 屯倉の設置が全国的に拡大される 筑紫の那津に官家を造り、諸国の屯倉から穀物を運ぶ（『日本書紀』宣化紀） 百済の聖明王、仏像・経論を倭国へ伝える （仏教の公伝）		古墳に複室構造の横穴式石室が出現する

時代	年	天皇	古墳	社会
			扇八幡古墳（前方後円墳・勝山町）が築造される このころ竹並・前田山（行橋市）などの横穴群の築造の最盛期 彦徳・高崎などに横穴群が形成される 源左エ門屋敷遺跡（徳永）・カワラケ田遺跡（皆見）に集落が営まれる（六世紀後半から七世紀にかけて）	群集墳の爆発的築造がみられる
五九三（後期）		推古四	彦徳甲塚古墳が築造される 八景山山麓円墳群が築造される 甲塚方墳が築造される 綾塚古墳・橘塚古墳（勝山町）が築造される	
六〇三		推古一一		このころから終末期古墳（巨石古墳）が出現する 聖徳太子、摂政となる 法興寺（飛鳥寺）が落成する 冠位十二階を制定する（『日本書紀』推古紀）
六〇四（終末期）		推古一二		憲法十七条をつくる（『日本書紀』推古紀）

古墳時代	六〇七	推古一五	小野妹子らを隋に派遣する（『日本書紀』推古紀）
	六〇九	推古一七	「筑紫大宰」という語が初見する（日本書紀）
	六三〇	舒明二	第一回遣唐使派遣（『日本書紀』舒明紀）
	六四五	大化元（孝徳元）	大化の改新、中大兄皇子ら蘇我入鹿らを殺害
	六四六	大化二（孝徳二）	大化改新の詔を発布
	六六三		薄葬令を定める
			白村江の戦いで日本軍が大敗する
	六六四		筑紫に水城が築造される
	六六五		大野城・基肄城が築造される
	六六七	このころ御所ケ谷神籠石（行橋市・勝山町・犀川町）が築造される	近江大津宮に遷都
	六七二		壬申の乱
	六八五	天武一四	家ごとに仏舎をつくらせる

六九〇	持統四	金築遺跡（惣社）に大集落が営まれる	（『日本書紀』天武紀）
		このころから豊前地方に古代寺院が建立され始める	筑紫大宰府が正式に発足する
六九四			藤原京に遷都
		上坂廃寺が建立される	
		椿市廃寺（行橋市）・木山廃寺（犀川町）が建立される	
七〇一	大宝元		大宝律令が完成する
七〇二	大宝二	豊前国仲津郡丁里などの戸籍が作成される（正倉院文書として現存する）	
		豊前国の名がはじめて見える	
		このころ豊前国仲津郡には呰見・高屋・中臣などの郷あり	
七一〇	和銅三		平城京に遷都する（奈良時代はじまる）
七一二	和銅五		『古事記』編纂
七二〇	養老四		『日本書紀』編纂
七二三			三世一身の法を定め、田地の開

七四〇	天平十二	このころから豊前国府が整備され始めた 大宰少弐藤原広嗣が反乱、豊前国北部が主戦場となる	墾を奨励する 諸国に国分寺・国分尼寺建立の詔を下す
七四一			三世一身の法を廃し、位階に応じて墾田私有を許す（墾田永年私財法）
七四三			
七四四	天平十六	宇佐放生会が始まる	
七四六	天平十八	豊前守従五位下大伴宿彌百世の名が見える（『続日本紀』）	
七五六	天平勝宝八	このころまでに豊前国分寺が完成する （この年に二十六国の国分寺に仏具を頒ち、その中に豊前国の名もみえる『続日本書紀』巻十九）	
七五九	天平宝字三		『万葉集』編纂
七七三	宝亀四	和気清麻呂が豊前国に赴任する	長岡京に遷都
七八四		このころ菩提廃寺（勝山町）が建立される	

七九四			平安京に遷都
八〇四	延暦二三	最澄入唐にあたり、香春神宮に立ち寄る	
八〇六	大同元	空海帰朝し、香春神宮に謝す	
八二四	弘仁一五	このころ徳政瓦窯跡で豊前国分寺の瓦をつくる	大宰府管内諸国で公営田制をおこなう
八三四	承和元	今元村金屋（行橋市）に奈良春日神社を勧請した	
八五九	貞観元	このころ今元村の海岸数百町歩が開拓された 宇佐八幡宮を山城国男山に移座する。神輿が草野（行橋市）に止宿し、この地に草野正八幡宮を建立。その後、郡内各地に八幡宮が勧請される	
八六九	貞観一一	このころ豊前国府域が大規模に整地され、築地塀・脇殿・門などの整った政庁が建てられる	新羅の海賊、博多津で豊前の調綿を奪う
八九四	寛平七		遣唐使が廃止される
九〇一	延喜元		菅原道真、大宰権帥となり筑紫へ下る

九三九	天慶二	このころ物社八幡神社（豊津町）が創建される	藤原純友、反乱を起す
一〇一六	長和五		藤原道長、摂政となる
一〇一九	寛仁元		刀伊（女真族）、北九州に来寇し、大蔵種材らの在庁府官の奮戦で追い払う
一〇八六	応徳三	還賢助成の経筒が等覚寺に納められた	このころから末法思想が広まる
一〇九四	嘉保元	久保村霜田（勝山町）に僧信快が経筒を納めた	院政が始まる
一一一〇	天永元		
一一五六	保元元		保元の乱おこる
一一五八	保元三	宇佐公通、豊前守に任じられる	平清盛、大宰大弐となる
一一五九	平治元		平治の乱おこる
一一六七	仁安二	このころ板井種遠が城井神楽城を本拠に京都・仲津・田川・築城各郡に勢力を広げ、豊前国府の田所・税所両職を兼任する このころ豊前国府が衰退する	平清盛、太政大臣となる

一一七五	安元元		法然、浄土宗をひらく
一一八五	文治元		壇ノ浦の戦で平氏が敗れ滅ぶ
一一八六	文治二		源頼朝、諸国に地頭をおく
一一八七	文治三	宇都宮信房、豊前国の地頭職となり、今井津より城井神楽城に入る（九月）	天野遠景、鎮西奉行人となる
一一九二	建久三		源頼朝、征夷大将軍となり、鎌倉に幕府をひらく
一一九七	建久八		幕府は九州諸国に図田帳の作成を命ずる
一一九八	建久九	武藤（少弐）資頼、豊前・筑前・肥前の守護となる	
一二一九	承久元		源氏が滅び、北条氏の執権政治が確立す
一二二一	承久三		承久の乱おこる
一二七四	文永十一	豊前城井宇都宮一族ら文永の役に参戦する（防塁構築の豊前の分担は今宿青木付近三キロメートル）	元の襲来（文永の役）
一二八一	弘安四	元の再襲来で、宇都宮一族（宇都宮通房、野仲長季、	元の襲来（弘安の役）

一二八四	弘安七	山田氏、友枝氏など）も参戦する	鎮西五社興行令が出され、武士の押領した社寺領を返付させる
一二八五	弘安八	岩門合戦後、宇都宮通房が肥後守護代となる	少弐景資、兄経資と家督を争い、筑前岩門城に敗れる（岩門合戦）
一二八六	弘安九	宇都宮通房、蒙古合戦の恩賞として上毛郡内の原井村・阿久封村（安曇村）が与えられる。また鎮西談議所が設けられ、通房はその奉行（頭人）の一人に選ばれる	
一二九〇	正応三	宇都宮通房、豊前国佐田荘の地頭職となる	
一二九三	永仁元		北条兼時、鎮西探題として博多に来る
一二九五	永仁三	このころ宇都宮通房、筑後国守護をつとめる	
一二九九	永仁七	このころ宇都宮通房没し、子頼房が筑後国守護を継ぐ。さらに鎮西引付衆となる	
一三二一	元享元		北条英時が探題として博多へ入る
一三二四	正中元	宇都宮頼房が本拠地を京都郡木井馬場から築上郡本	後醍醐天皇、倒幕を計画して失

		庄に移す。	敗する（正中の変）
一三三一	元徳三（南）	天徳寺を造営し、永代の菩提所となす	後醍醐天皇、二回目の倒幕を計画するが失敗する（元弘の乱）
一三三二	元弘元（北）		鎌倉幕府滅亡
一三三三	正慶二（南）	宇都宮守綱、鎮西探題攻略に豊前の武士を率いて参加する	少弐貞経・大友貞宗・島津貞久ら鎮西探題北条英時を攻め、敗死させる
	元弘三（北）		建武の新政はじまる
一三三四	建武元	北条氏の残党規矩高政が帆柱山城に挙兵するが、少弐頼尚・大友貞載らがこれを討つ	足利尊氏、後醍醐天皇に叛く
一三三五	建武二	少弐頼尚、豊前国の守護となる	尊氏敗れ、九州へ下る。（菊池武敏らを博多多々良河口で破り（二月）、東上する（四月）
一三三六	延元元（南） 建武三（北）	宇都宮冬綱、尊氏につき九州討伐の軍をおこす	一門の一色範氏を残して九州の押えとし、鎮西管領（九州探題）の始まりとなる
		仲津郡天雨田庄を尊氏が一色範氏へ与える	

			尊氏は光明天皇をたてる（八月） 尊氏、室町幕府を開く（十一月） 後醍醐天皇、吉野に移り（南朝）、南北朝対立時代となる（十二月） 足利尊氏、北朝より征夷大将軍に任命される（八月）
一三三八	延元三（南） 暦応元（北）	宇都宮隆房、南朝方として城井城に挙兵し、少弐頼尚がこれを討つ（四月）	懐良親王、後醍醐天皇より九州下向を命ぜられる（六月）
一三三九	延元四（南） 暦応二（北）	宇都宮冬綱、筑後国守護に復帰する	
一三四〇	興国元（南） 暦応三（北）	新田義高、懐良親王にしたがって豊前国に下り、馬ケ岳城に入る（伝）	少弐頼尚、菊池武敏を攻撃（五月） 懐良親王、肥後国に入る（十二月）
一三四一	興国二（南） 暦応四（北）		
一三四七	正平二（南） 貞和三（北）		
一三四九	正平四（南）		足利直冬、尊氏に追討され、九

	貞和五(北)		州に入る。少弐頼尚らもこれに従う（九月） このあと九州地方の政治関係者は宮方（南朝・征西府方）・幕府方（北朝・探題方）・直冬方（佐殿方）と三派にわかれて乱れる
一三五〇	正平五(南) 観応元(北)	豊前国の南朝方新田・土岐ら挙兵（五月） 大友氏泰が豊前国守護となる	観応の擾乱（尊氏と弟直義の対立激化） 直冬、九州挙兵の報に尊氏自ら討伐のため京を発つ（十月） 幕府は少弐頼尚の豊前・筑前守護を解任する
一三五一	正平六(南) 観応二(北)		尊氏・直義が講和。一色範氏、鎮西探題の地位を追われる（三月） 足利尊氏、直冬を鎮西探題とする（三月）

			尊氏、直義との講和が破れ、直義は北国から鎌倉へ（八月） 尊氏、直冬の職を剝奪する（九月） 尊氏、直義との和睦が不調に終り南朝に下る（十月） 南朝が崇光天皇を廃止し、観応の年号をやめ、正平を用いる 探題一色直氏、菊池武光（宮方）と連合し、直冬・少弐頼尚を太宰府に破る 直冬、長門に走り長門豊田城で尊氏方に敗れる。その後、南朝に帰順する 後村上天皇京都に突入し、足利義詮近江に走る（二月） 義詮、入京（三月）し、京都を奪回する
一三五二	正平七(南) 文和元(北)	大友氏時（氏泰弟）、豊前守護となる 少弐頼尚、宮方に帰順し、宮方の豊前・筑前守護に任ぜられる	

一三五三	正平八(南) 文和二(北)	宮方、この年以後、約二十年間大宰府を本拠に北部九州を制圧する	少弐頼尚、菊池武光ら筑前針摺原で一色範氏を破る（範氏、肥前へ） 直冬、東上して周防国に至る 南朝軍京都に迫り後光厳天皇は延暦寺に移る（六月） 足利義詮入京（七月） 尊氏・義詮、後光厳天皇を奉じて入京（九月）
一三五四	正平九(南) 文和三(北)	宇都宮守綱（高房・冬綱）、大友氏時にかわり豊前国守護となる（年末）	直冬らの南軍入京（一月） 尊氏、京都を回復（二月） 直冬らが京都を脱出（三月） 足利義詮も入京し、後光厳天皇も還幸する（四月） 懐良親王、菊池武澄らを率いて肥前国府に入る。一色範氏・直氏父子は長門国へ逃れる（八月）
一三五五	正平一〇(南) 文和四(北)	懐良親王、豊後日田・同国府・豊前宇佐・同城井・筑前植木を転戦し、博多へ入る（十月）	
一三五七	正平一二(南)	少弐頼尚（宇佐弥勒寺宮領大野井庄の侵略などによ	

一三五八	延文二(北) 正平一三(南) 延文三(北)	り)、征西府（宮方）より豊前守護を解任され、五条良遠が国司として派遣される	足利尊氏没（四月） このころ少弐・大友両氏が再び幕府方となる（十一月） 義詮、征夷大将軍となる(十二月)
一三五九	正平一四(南) 延文四(北)	宇都宮守綱、筑後川の戦いに少弐頼尚方として参加する 豊前守護代西郷顕景が戦死する。宮方宇都宮隆房も討死する	懐良親王、菊池武光らを率いて少弐頼尚と筑後大保原で戦い勝利する（筑後川の戦い）（八月） このころ少弐頼尚、反宮方となり幕府より筑前守護に復任される
一三六〇	正平一五(南) 延文五(北)		斯波氏経、九州探題となる 宮方、征西府を大宰府に移す（八月）
一三六一	正平一六(南) 康安元(北)		宮方、規矩郡を制圧（十月） 懐良親王、大宰府へ入る（十月）

一三六二	正平一七 貞治元		菊池武光、長者原で斯波氏経、少弐冬資と戦いこれを破る（長者原の戦い）（九月） 門司一族、宮方・武家方に分裂して抗争（十月）
一三六四	正平一九（南） 貞治三（北）	菊池武光、馬ケ岳城の厚東義統（宮方）を救援し、大内弘世（前年より幕府方）・門司親尚・麻生氏らを破り、門司城を抜いて長門に入る。大内弘世は山口へ	
一三六七	正平二二（南） 貞治六（北）	宮方（懐良親王・菊池・島津・松浦・原田・秋月・厚東各氏）と幕府方（大内・大友・門司各氏）が関門で海戦をおこない、宮方が破れ、菊池氏は香春岳城、厚東氏は苅田城に入る（二月）	足利義満、征夷大将軍となる（十二月）
一三七〇	建徳元（南） 応安三（北）		今川了俊（貞世）、九州探題に任命される（六月）
一三七一	建徳二（南） 応安四（北）		今川了俊、九州に赴任。門司一族・長野・麻生・宗像・底井野・頓野・秋月の各氏相次いで着到（二月）
一三七二	文中元（南） 応安五（北）		了俊大宰府を攻略。宮方、北九州の前進基地すべてを失う（八

一三七四	文中三(南) 応安七(北)	宇都宮守綱、豊前城井高畑城に宮方として挙兵 了俊が弟氏兼らにより鎮圧する（城井合戦） 大内義弘、豊前国守護となる	懐良親王軍、了俊と筑後生糸村で戦う（四月）
一三七五	天授元(南) 永和元(北)	大内義弘、了俊に応じて豊後より豊前に進む（十二月）	懐良親王軍、征西将軍職を良成親王に譲る（夏）
一三九一	嘉慶八(南) 明徳二(北)		征西将軍良成親王、幕府軍と講和
一三九二	元中九(南) 明徳三(北)	大内義弘、このころ豊前・周防・長門・石見・和泉・紀伊の守護	南北朝の合一（十月）
一三九四	応永元		足利義満、太政大臣となる（十二月）
一三九五	応永二		今川了俊、京都に召還され、罷免される
一三九六	応永三		渋川満頼、九州探題に任命され、博多に着任（四月）
一三九七	応永四		探題渋川満頼、菊池武朝・少弐貞頼らと戦う

一三九九	応永六	少弐貞頼、この年に豊前国守護となる	大内義弘、大友氏と結び少弐氏を破って大宰府を占領する
一四〇三	応永一〇	大内盛見、豊前国守護となる（七月）	大内義弘、幕府に反抗して挙兵し、堺で討たれる（応永の乱）
一四〇四	応永一一		勘合貿易始まる
一四二三	応永三〇	大内盛見、宇佐行幸会を復活する	
一四二八	正長元		このころ、大内盛見、将軍御料国筑前国の代官となる
一四三一	永享三	大内盛見、一揆鎮定のため九州に下り、筑前萩原で戦死し（六月）、この年より豊前は大友持直の所領となる	九州各地に土一揆起こり、少弐・大友・菊池の各氏ら一揆と通じる
一四三四	永享六	大内持世、鞍持合戦で大友持直・少弐嘉頼を筑後へ追いやる	
一四四一	嘉吉元		嘉吉の乱、足利義教が暗殺される
一四六七	応仁元	大内政弘、西軍側として周防・長門・筑前・豊前の兵を率いて上京	応仁の乱おこる（五月）
一四六九	文明元	大友親繁、豊前・肥前・筑前の諸城を攻めてこれを	少弐政尚、対馬の兵船数百艘を

		陥す（八月） 大内方の紀伊・長野氏を下して、豊前国の守護職を与えられる	もって筑前に渡り大宰府に入る（正月） 大友親繁・少弐頼忠（政資）、東軍細川勝元について大内氏と戦う（五月） この年、赤痢・疱瘡が流行して多くの死者がでる
一四七〇	文明二	大内教幸、大友氏と結び挙兵、小倉城に陶弘護と戦い敗走（三月）（馬ケ岳城に入って翌年自殺すると伝える）	
一四七四	文明六	僧雪舟、豊筑各地を巡歴し、七六年亀石坊に作庭する	
一四七八	文明一〇	大内政弘、豊前に渡海し少弐政資の兵を破って豊前・筑前を平定（九月）	少弐氏、大宰府で敗れて筑前より敗退する（九月） 大内政弘、筑前国に徳政令を出す（十月）
一四八〇	文明一二		宗祇、大宰府・博多・宗像巡遊 龍宮寺で連歌百韻の興行がある（九月）
一四八五	文明一七		この年、早良郡内の西山五ケ村

一四八八			の農民が守護代官を弾劾し、解任に成功する
一四九二			山城国一揆（～九三） 加賀の一向一揆、一国支配（～一五八〇）
一四九五	明応四	豊前・筑前・周防・長門の守護大内政弘歿す（九月）	大内政弘、近江参陣のため豊前国中の社寺領に兵糧米を徴する（五月） 大内政弘、少弐政資と筑前筥崎で戦う（五月）。筥崎宮焼失
一四九七	明応六		少弐政資、筑前を攻略し大宰府に拠る、大内義興の兵これを破る（正月）
一四九九	明応八	大友親治、豊前求菩提山の寺領を安堵する（五月）	雨なし、飢饉のため餓死者が多い
一五〇〇	明応九		

一五〇一	文亀元	大内義興、大友・少弐の軍を馬ケ嶽城に破る（七月）		
一五〇九	永正六	この年、少弐氏の残党、豊前・筑前に蜂起する		
一五二〇	永正一七	大内義興、豊前国守護職を回復する		
一五二五	大永五	大内氏、豊前国の寺社領を安堵する（十二月）		
一五二七	大永七	大内義興、求菩提山権現の法度を定める（十二月）		
一五二九	享禄二	大内義隆、杉重信を豊前守護代とする（七月）		
一五三二	天文元	豊前宇都宮弥三郎長房、神楽城に艾射を行う。子鎮房、大内氏に従い、豊後に出兵		
一五三六	天文五	大友義鑑、少弐資元と組んで豊前国へ侵入		
一五三九	天文八	大内義隆、豊前興国寺に禁制を掲げる		
一五四三	天文一二			
一五四八		ポルトガル船が豊前を訪れ、貿易をおこなう		
一五四九	天文一八		筑前に土一揆起こり、徳政令を要求する 大内義隆、筑前に徳政令を出す（七月） 大内義隆、大宰大弐に任ぜられる（五月） 種子島に鉄砲が伝来 フランシスコザビエル、鹿児島	

一五五〇	天文一九		に来る（キリスト教の伝来）（十月） フランシスコザビエル、平戸より博多へ来る（十月）
一五五一	天文二〇	貫親清、大内氏の抱城、馬ケ嶽城を守る。また城井房純も宇佐の妙見岳を守る（十月）	大内義隆、陶晴賢の反逆で、長門大寧寺で自殺（九月） 大友晴英、山口に入り大内家を継ぐ（九月）→大内義長
一五五二	天文二一		
一五五六	弘治二	毛利・秋月勢、豊前へ進出。大内義長勢は防戦に追われる	大内義長、毛利元就に攻められ長府長福寺で自刃（四月） 毛利氏、北九州侵入を開始する（七月） 桶狭間の戦い
一五五七	弘治三	大友義鎮（宗麟）、豊前に進出して馬ケ岳城の長野吉辰らを討伐する（六月）	
一五五九	永禄二	大友義鎮、豊前・筑前の守護となる（六月）。さらに九州探題に任ぜられる（十一月）	
一五六〇	永禄三		
一五六一	永禄四	大友・毛利軍、門司城を中心に豊前の地で戦う（十一月） 毛利方が豊前をほぼ制圧。大友方は香春岳・松山両	

一五六一	永禄五	城を放棄して退く（十一月） 大友軍、松山城に毛利勢を攻める（九～十一月）	
一五六三	永禄六	大友宗麟、松山城を囲み破れず（一月） 毛利氏、大友氏との和議を諾して松山城を大友氏へ渡し、香春城からも撤収（三月）	
一五六八	永禄一一	毛利方の小早川隆景・吉川元春、豊前に入り、大友方に寝返った長野弘勝の三岳城・助守の等覚寺城を攻略する。毛利方、大友宗麟の兵と豊前沖浜口で戦い、大友水軍を破る（八月） 大友方、毛利方の松山城を攻めるが、杉重長らはこれを防ぐ（九月）	将軍足利義輝の命により、毛利元就と大友義鎮が和睦する（三月） 織田信長が将軍足利義昭を奉じて入京
一五六九	永禄一二	大友宗麟、北部九州六ケ国を制覇する 高橋鑑種、大友氏に降伏。大友宗麟は鑑種を小倉城へ移す（十二月）。豊筑の諸士も相次いで大友氏に降る	将軍義昭、大友宗麟に和睦を勧める（二月、四月、十二月） 大内輝弘の山口占領で、毛利方筑前を撤退する
一五七〇	元亀元		本願寺光佐（顕如）、諸国の一向宗徒に呼びかけて挙兵し、信長と戦う（石山合戦始まる）

一五七一	元亀二		毛利元就死去
一五七三	天正元		織田信長、将軍義昭を追放 室町幕府滅ぶ
一五七八	天正六		大友義統、日向耳川の戦いで、島津義久の軍に大敗
一五七九	天正七	杉重良（大内家臣、松山城主）、大友氏に通じ、蓑島に拠る。 秋月種実、高橋鑑種、宇都宮（城井）鎮房らと通じ、大友氏に背く（二月） 高橋鑑種、大友方の香春城の千手鑑元を襲って自殺させ、（三月）、さらに杉重良を蓑島城に攻める（蓑島合戦・四月）。杉重良は敗死	
一五八〇	天正八		信長、石山本願寺光佐（顕如）と講和
一五八一	天正九	大友宗麟、彦山衆徒が秋月・竜造寺氏を援けたことにより坊舎を殆ど焼く。山伏は上仏来山に立籠り、応戦する（十月）	
一五八二	天正一〇	高橋元種（鑑種の養子）、下毛郡・宇佐郡に進出し、	本能寺の変で織田信長殺される

一五八三	天正一一	大友勢は宇佐妙見岳城に孤立する 大友勢が反撃を始め、下毛・宇佐郡で激戦が続く ※このころ豊前国分寺焼失か	豊臣秀吉が関白となる
一五八五	天正一三	宇都宮（城井）鎮房、高橋元種、秋月種実、長野種信らが島津氏の幕下となる	
一五八六	天正一四	島津勢の筑前の戦いに宇都宮（城井）・高橋・秋月・長野各氏も島津方として参戦（七月） 小早川・吉川・黒田らが、高橋元種の小倉城を落し、さらに馬ケ岳城（長野祐盛）・障子ケ岳城（高橋元種の属城）・香春岳城・松山城（長野種信）・宇留津城（宇都宮鎮房の部将加来与次郎）を攻略する（一〇・一一月）	豊臣秀吉の命で、毛利・大友両氏が和睦する 島津勢、筑後・筑前に侵入、諸城を落し、岩屋城に高橋紹運を破り戦死させる。さらに宝満城を落し、立花城を囲む（七月） 豊臣秀吉、黒田孝高・毛利輝元に島津氏を討たせる（七月） 島津氏、筑前から撤退（八月） 島津氏が降伏し（五月）、秀吉
一五八七	天正一五	秀吉、小倉を経て馬ケ岳城に入る（三月）。ついで	

		岩石城（秋月方）を攻め落とす（四月） 黒田孝高に豊前六郡（京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐） 毛利勝信に豊前二国（規矩・田川） 宇都宮鎮房は伊予国へ移封を命じられるが拒否し、毛利勝信を頼り柿原（田川郡）へ移る 黒田氏、領内仕置三ケ条を出す 宇都宮鎮房、旧地城井奪回を企て挙兵 これに呼応して在地土豪（鬼木・山田・八屋などの各氏）勢と黒田勢が桑野原（新吉富村）で戦い敗れる（桑野原の戦）	が九州を平定する 秀吉が伴天連追放令を出す 秀吉が博多筥崎で九州諸大名の封域を定める（六月）
一五八八	天正一六	宇都宮鎮房、中津城で誘殺される 黒田氏、中津城の修築をはじめる	刀狩り令が出される（兵農分離）
一五九〇	天正一八		秀吉が全国統一
一五九二	文禄元		秀吉の朝鮮出兵（文禄の役）
一五九三	文禄二		長崎でキリシタン二六人を処刑

一五九七	慶長二		秀吉の朝鮮再出兵（慶長の役）
一五九八	慶長三		秀吉、死す
一六〇〇	慶長五	豊前へ細川忠興入部、中津城へ入る	
一六〇一	慶長六	細川氏が領内の検地をおこなう	
一六〇二	慶長七	小倉城築造に取りかかる。忠興が小倉城へ移る	
一六〇三	慶長八	郡奉行を置く。仲津・築城郡奉行に松井康之 このころ細川氏の手永の制が創設される	徳川家康、征夷大将軍となり、江戸に幕府を開く
一六一一	慶長一六	細川氏に貿易朱印条が与えられる	
一六一二	慶長一七		幕府直轄領にキリシタン禁止令
一六一三	慶長一八		全国大名にキリシタン禁止令
一六一四	慶長一九	細川領内のキリシタン改め実施	大阪冬の陣
一六一五	元和元	仲津郡から二四人のキリシタン転宗者がある	幕府が一国一城の制を布告する 大阪夏の陣
一六一八	元和四	細川領で、キリシタンを極刑に処す（小倉二五人・中津一三人）	
一六二一	元和七	細川忠興が中津城に移り、忠利が藩主として小倉城	

		へ入り、国請取を済ませる	
一六一二	元和八	仲津郡は大村二郎左衛門・国作善七郎・伊良原二郎兵衛・帆柱儀左衛門の四手永で支配	
		細川氏、人畜改帳を作成する	
一六一六	寛永三	企救・京都・仲津・築城・上毛五郡の水帳改正	
一六三一	寛永九	仲津郡は元永五郎兵衛・永井儀左衛門・国作九郎左衛門・伊良原次郎兵衛の四手永で支配	
		小笠原氏の入部によって、手永の編成替が行われる。仲津郡は国作・節丸・平嶋・元永・長井五手永の編成となる	
		細川氏、肥後国へ転封	
一六三三	寛永一〇	豊前には小笠原氏の一族が入部する	
一六三五	寛永一二	幕府巡見使一行来る	
一六三七			鎖国令が出る
一六三八	寛永一四	島原の乱へ小倉藩から出兵（八一三三人）	参勤交代が制度化される 島原の乱起こる
一六三九	寛永一六		ポルトガル船の来航禁止（鎖国の完成）

一六四三	寛永二〇		田畑永代売買を禁止する 田畑勝手作の禁令が出る
一六四七	正保四	小笠原忠真が幕府勘定奉行所へ「豊前国絵図」を提出する	
一六四九	慶安二		幕府が「慶安御触書」を出す
一六五八	万治元	小倉藩が四ツ高制を始める	
一六六四	寛文四	宗門改め始まる。絵踏み制度を宗門改めに組み入れる	宗門改役の設置
一六六七	寛文七	幕府巡見使一行来る	
一六七〇	寛文一〇	寺請制度によって、寺の門徒になることを義務づけられる	寺請制度の創設
一六七一	寛文一一	小笠原真方（長高）に一万石を分封（小倉新田藩）	
一六八一	天和元	小倉枡を京枡に改める	
一六八七	貞享四	幕府巡見使一行来る	
一六八八～一七〇四	元禄年間	不作凶荒に備える名目で反別表取り立て 差上米を定額とする	
一七〇〇	元禄一三	幕府勘定所へ「豊前国絵図」提出	

一七〇六	宝永三	企救・京都・仲津・築城・上毛五郡の水帳改正	
一七一〇	宝永七	幕府巡見使一行来る	
一七一七	享保二	幕府巡見使一行来る	
一七二一	享保六		全国人口調査始まる。二回目（享保一一年）以降六年に一回実施
一七二七	享保一二	四ツ高一〇〇石につき鶏卵を一か月二〇個（一個二文換算）を徴収する	
一七三二	享保一七	享保飢饉、小倉藩の餓死者約四万人 豊津町域の餓死者約九〇〇人	西日本一帯の飢饉
一七四四	延享元	このころ、惣定免制が実施される	
一七四六	延享三	幕府巡見使一行来る	
一七六一	宝暦一一	幕府巡見使一行来る	
一七七七	安永六	犬甘兵庫知寛家老となり、面扶持制など改革を行う	
一七八三～九	天明三～八	天明の飢饉	
一七八七	天明七		松平定信が老中となり、寛政の改革がおこなわれる
一七八九	寛政元	幕府巡見使一行来る	

一七九二			ロシア使節ラクスマン来航
一七九三	寛政五	この年から一〇年間惣定免を実施する	
一七九四	寛政六	夫役を高割りから人頭割りにする御建替法が出される	
一七八九～一八〇一	寛政年間	歩掛米を定納化する	
一八〇八	文化五		フェートン号事件
一八一〇	文化七	伊能忠敬の測量隊が仲津郡の測量をする	
一八一四	文化一一	藩内の抗争が起る（白黒騒動）	
一八一九	文政二	宗門改場所が国分寺から禅興寺（現行橋市）にかわる	
一八二一	文政四	幕府の許可がおりて、宇島築港に着手する	
一八二四	文政七	恒遠醒窓が上毛郡薬師寺に恒遠塾を開く	
一八二五	文政八	宇島三波止完成	幕府は諸大名に異国船打払令をだす
一八二八	文政一一	二度にわたる風水害、小倉藩の被害は居家の倒壊九八五〇軒、死傷不明者五三〇人 宇島築港竣工式がおこなわれる	

一八三六～七	天保七～八	天候不順のため大凶作となり飢饉。築城郡筋奉行延塚卯右衛門は郡民救済の責任をとって切腹する	
一八三七	天保八	小倉城火災。天守閣など焼失	大塩平八郎の乱、モリソン事件
一八三八	天保九	幕府巡見使一行来る	
一八四〇	天保一一	行事村飴屋、仲津郡綿実座を担当する	老中水野忠邦が天保の改革を始める
一八四一			幕府が異国船打払令をやめ、薪水や食料の給与を許す（薪水給与令）
一八四二	天保一三	小倉藩が海岸防衛のため、大砲一五門を鋳造する	
一七四三	天保一四	宗門改場所が国分寺と禅興寺で隔年ごとに実施となる	
一八五〇	嘉永三	風水害、国作手永の被害は、居家の倒壊九八軒、半壊一五二軒	
一八五三	嘉永六		ペリーが浦賀へ来航する
一八五四	安政元	小倉藩が種痘を実施する	日米和親条約調印
一八五八	安政五		絵踏制度の廃止（幕府が外国の抗議で踏絵制を

一八六〇	万延元		廃止する）
一八六一	文久元	英国人が企救郡楠原村に上陸し、村人が大騒動する	日米修交通商条約調印
一八六二	文久二	英国軍艦が関門海峡一帯を測量する	安政の大獄が始まる
一八六三	文久三	小倉藩が領内海岸各地に砲台を建設する	桜田門外の変
		領内各郡より農兵を募る	坂下門外の変、生麦事件
		長州兵が企救郡田野浦へ上陸して砲台を築く（八月撤退）	長州高杉晋作らが奇兵隊を編成する
			薩英戦争
			公武合体派が攘夷派を京都より追放
一八六四	元治元	小倉藩が長州征伐の第一線となる	（八月十八日の政変・七卿落ち）
			禁門の変
			英・仏・米・蘭四国連合艦隊が下関を砲撃
			第一次長州征伐令（幕府が諸藩に長州征伐を命ずる）
一八六五	慶応元	幕府が再び長州征伐を命ずる	

一八六六	慶応二	長州軍が大里を攻めて戦闘が始まる 小倉藩は小倉城を自焼して香春へ後退する（八月一日） 百姓一揆が起こり、庄屋などが被害	薩長同盟成立 第二次征長戦が始まる
一八六七	慶応三	小倉藩の絵踏制度は、前年の小倉変動で踏み絵を焼失したのを契機に廃止される 小倉藩・長州藩の和議成立。企救郡は長州預かりとなる 小倉藩は藩庁を香春に開く	徳川慶喜が大政奉還、王政復古を宣言する

参考文献

〈上巻〉

第一編　歴史の背景としての自然

豊前行橋平野の地形発達―周防灘沿岸平野の地形学的研究(1)　大分大学教育学部研究紀要　千田　昇　一九八四

豊前行橋平野の沖積世における地形発達　東北地理　千田　昇　一九八五

福岡県の気候「福岡県百科事典」(上)　藤元　囡夫　西日本新聞社　一九八二

「九州の気候」　福岡管区気象台　一九六四

「福岡の気象１００年」　福岡管区気象台　一九九〇

土地分類基本調査「行橋・蓑島」1/5万　福岡県　一九七〇

土地分類基本調査「中津」1/5万　福岡県　一九七〇

土地分類基本調査「後藤寺」1/5万　福岡県　一九七一

半旬別気象表　福岡県農業総合試験場豊前分場

福岡県田川郡赤村油須原における今川の急曲流について　地学研究　波多江信広　一九七七

北九州白亜紀花崗閃緑岩・花崗岩接触部における〝ジルコン帯〟の存在について　地理学雑誌　唐木田芳文　一九五四

北九州花崗岩類の地質学的分類　日本応用地質学会九州支部会報　6号　唐木田芳文　一九八五
「福岡県の歴史」　川添昭二ほか　光文館　一九九〇
「異常気象レポート94」　気象庁　一九九四
瀬戸内海と筑豊地塊の境界帯の起源論地理学評論　東木　龍七　一九二八
「豊津町誌」　豊津町　一九八五
豊前国府および節丸西遺跡　豊津町文化財調査報告書　第9集　豊津町教育委員会　一九九〇
Studies on the Aso Pyroclastic Flow Deposits in the region to the west of Aso caldera, southwest Japan.　Watanabe,K　Geology.Mem.Fac.Educ. Kumamoto Univ.,Nat.Sci.　一九七八

第二編　先史・原始時代

古代史復元1　旧石器人の生活と集団　稲田　孝司　講談社　一九八八
日本の旧石器文化3　遺跡と遺物〈下〉　麻生優・加藤晋平・藤本強　雄山閣　一九八四
北九州市史　総論　先史・原史　北九州市史編纂委員会　北九州市　一九八五
旧石器時代　図説発掘が語る日本史6　九州・沖縄編　下川　達彌　新人物往来社　一九八六
「知の再発見」双書50　人類の起源　エルベール・トマ　創元社　一九九五
日本旧石器の研究　新版考古学講座　芦沢　長介　雄山閣　一九七八
京築地方の旧石器について　とよ7号　栗焼　憲児　豊前国府・国分寺調査研究会　一九八三

十双遺跡・赤幡森ケ坪遺跡・塞ノ神遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告(8)　福岡県教育委員会　一九九二
徳永川ノ上遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第4集　福岡県教育委員会　一九九五
鋤先遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第5集　福岡県教育委員会　一九九五
富久遺跡Ⅱ地区　苅田町教育委員会　一九九二
古代史復元2　縄文人の生活と文化　講談社　一九八八
古代史復元3　縄文人の道具　講談社　一九八八
新版考古学講座3　先史文化　八幡一郎・大場磐雄・内藤政恒
火山灰と有文土器―九州のあけぼの　新版古代の日本③　九州・沖縄　島津　義昭　雄山閣　一九七八
世界考古学大系第1巻　日本Ⅰ先縄文・縄文時代　八幡　一郎　角川書店　一九九一
九州の土器　縄文文化の研究4　縄文土器Ⅱ　山崎　純男　平凡社　一九五九
安武・深田遺跡　安武・土井の内遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―4―　島津　義昭　雄山閣出版　一九八一
広末・安武遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―5―　福岡県教育委員会　一九九一
神手遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―6―　福岡県教育委員会　一九九一
山崎遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―7―　福岡県教育委員会　一九九二
辻垣畠田・長通遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第2集　福岡県教育委員会　一九九二
団後遺跡・西一町田遺跡・炭山遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第3集　福岡県教育委員会　一九九四
徳永川ノ上遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第4集　福岡県教育委員会　一九九五
鋤先遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第5集　福岡県教育委員会　一九九五
土佐井地区遺跡　大平村教育委員会　一九九〇

菜畑遺跡　唐津市教育委員会　一九八二
城井遺跡群　犀川町教育委員会　一九九二
豊前国府および節丸西遺跡　豊津町教育委員会　一九九〇
吉木遺跡　福岡県教育委員会　一九八九
城井谷Ⅰ　築城町教育委員会　一九九二
原井三ッ江遺跡　大平村教育委員会　一九八九
石町遺跡　椎田町教育委員会　一九八八
十双遺跡・赤幡森ケ坪遺跡・寒ノ神遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告(8)　福岡県教育委員会　一九九二
小原谷Ⅰ　椎田町教育委員会　一九九二
浄土院遺跡　浄土院遺跡調査団　一九七二
古代史復元4　弥生農村の誕生　下條　信行　講談社　一九八九
古代史復元5　弥生人の造形　工楽　善通　講談社　一九八九
日本の考古学Ⅲ　弥生時代　和島　誠一　河出書房新社　一九六六
九州考古学第55号　児玉　真一　九州考古学会　一九八〇
農耕の開始とクニの出現　新版古代の日本③　九州・沖縄　高倉　洋彰　角川書店　一九九一
前方後円墳と弥生墳丘墓　近藤　義郎　青木書店　一九九五
青銅製武器・祭器　地方史マニュアル⑥　考古資料の見方〈遺物編〉　喜谷　美宣　柏書房　一九七七
弥生文化の研究第5巻　道具と技術Ⅰ　金関恕・佐原真　雄山閣出版　一九八五
木器の製作と役割　日本考古学を学ぶ(2)　町田　章　有斐閣　一九七九
金属器の普及と性格　日本考古学を学ぶ(2)　川越　哲志　有斐閣　一九七九
九州考古学25・26　九州考古学会　一九六五
九州考古学7・8　九州考古学会　一九五九

徳永川ノ上遺跡　平成2年度文化講演会(京築地区)資料　柳田　康雄　一九九〇
奴国の首都　須　岡本遺跡　春日市教育委員会　吉川弘文館　一九九四
王墓の出現　古代史復元4　弥生農村の誕生　酒井　龍一　講談社　一九八九
古代史復元4　弥生農村の誕生　下條　信行　講談社　一九八九
下稗田遺跡　行橋市教育委員会　一九八五
黒添・法正寺地区遺跡群　苅田町教育委員会　一九八七
穴ケ葉山遺跡　大平村教育委員会　一九九三
尻高畑田遺跡　新吉富村教育委員会　一九九二
皆見遺跡・カワラケ田遺跡・下原遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―3―　福岡県教育委員会　一九九一
安武・深田遺跡　安武・土井の内遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―4―　福岡県教育委員会　一九九一
広末・安永遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―5―　福岡県教育委員会　一九九一
竹並遺跡　竹並遺跡調査会　一九七九・四・二〇
神手遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―6―　福岡県教育委員会　一九九二
十双遺跡・赤幡森ケ坪遺跡・寒ノ神遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告(8)　福岡県教育委員会　一九九二
広幡城跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―9―　福岡県教育委員会　一九九二
辻垣ヲサマル遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第1集　福岡県教育委員会　一九九三
辻垣畠田・長通遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第2集　福岡県教育委員会　一九九四

団後遺跡・西一町田遺跡・炭山遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第3集　福岡県教育委員会　一九九四
徳永川ノ上遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第4集　福岡県教育委員会　一九九五
大西遺跡　豊前市教育委員会　一九八八
矢留遺跡　県道椎田・勝山線関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ　福岡県教育委員会　一九八九
土佐井ミソンデ遺跡・穴ケ葉山4号墳・穴ケ葉山墳墓群　大平村教育委員会　一九九一
安永遺跡　築城町教育委員会　一九八四
亀田南遺跡　勝山町教育委員会　一九八一
菜畑遺跡　唐津市教育委員会　一九八二
牛頭天王遺跡・垂水高木遺跡　新吉富村教育委員会　一九九四
北垣古墳群　豊津町教育委員会　一九九五
葛川遺跡　苅田町教育委員会　一九八四
楯築弥生墳丘墓の研究　近藤　義郎　楯築刊行会　一九九二・一二・二〇
前田山遺跡　行橋市教育委員会　一九八七
豊前国府および源左ェ文門屋敷遺跡　豊津町教育委員会　一九九二
豊前国府および正道遺跡　豊津町教育委員会　一九八九
城井遺跡群　犀川町教育委員会　一九九二
安永田遺跡　鳥栖市教育委員会　一九八五
今山・今宿遺跡　福岡市教育委員会　一九八一
吉野ケ里　佐賀県教育委員会　吉川弘文館　一九九四
内屋敷遺跡　行橋市教育委員会　一九八八

中桑野遺跡　新吉富村教育委員会　一九七八
立岩遺蹟　立岩遺跡調査委員会　河出書房新社　一九七七
平塚川添遺跡発掘調査概報　甘木市教育委員会　一九九三
古代史復元6　古墳時代の王と民衆　講談社
古代史復元7　古墳時代の工芸　講談社
前方後円墳と弥生墳丘墓　都出比呂志　一九八九・六・二〇
石塚山古墳の謎　白石太一郎　一九九〇・一・三〇
古墳時代以降の土器製塩　吉備の考古学的研究　近藤　義郎　一九九五・一・二五
製鉄と鉄鍛冶　吉備の考古学的研究　長嶺　正秀　一九九一・一・一・二五
日本の考古学Ⅳ　古墳時代(上)　大久保徹也　一九九二・一・一・二五
古墳時代の研究2　集落と豪族居館　光永　真一　一九九二・一・一・二五
古墳時代の研究7　古墳Ⅰ　墳丘と内部構造　藤沢　長治　一九六六・六・三〇
古墳時代の研究8　古墳Ⅱ　副葬品　石野博文・岩崎卓也　河出書房新社
古墳時代の研究9　古墳Ⅲ　埴輪　河上邦彦・白石太一郎　一九九〇・六・五
古墳時代の研究10　地域の古墳Ⅰ　西日本　石野博文・岩崎卓也　雄山閣出版
前方後円墳集成　九州編　河上邦彦・白石太一郎　一九九二・四・二〇
九州考古学研究　古墳時代篇　石野博文・岩崎卓也　雄山閣出版
河上邦彦・白石太一郎　一九九一・一・五
石野博文・岩崎卓也　雄山閣出版
河上邦彦・白石太一郎　一九九二・一・七
石野博文・岩崎卓也　雄山閣出版
河上邦彦・白石太一郎　一九九〇・一・五
近藤　義郎　山川出版社
小田富士雄　学生社　一九七九

石塚山古墳発掘調査概報　苅田町教育委員会　一九八八
黒添・法正寺地区遺跡群　苅田町教育委員会　一九八七
皆見遺跡・カワラケ田遺跡・下原遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査
報告－3－　福岡県教育委員会　一九九一
安武・深田遺跡　安武・土井の内遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査
報告－4－　福岡県教育委員会　一九九一
番塚古墳　苅田町教育委員会　九州大学文学部考古学研究室　一九九三・三・三一
渡築紫遺跡　行橋市教育委員会　一九九四
新津原山古墳群　苅田町教育委員会　一九九五
団後遺跡・西一町田遺跡・炭山遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第3集　福岡県教育委員会　一九九四
鋤先遺跡　一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第5集　福岡県教育委員会　一九九五
豊前市横武・千束地区(2)　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告
－Ⅱ－　豊前市教育委員会　一九九〇
豊前市横武・千束地区(3)　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告
－Ⅲ－　酒井　仁夫　豊前市教育委員会　一九九一
隼人塚古墳　行橋市教育委員会　一九八二
黒部古墳群　玄洋開発株式会社　一九七九・三・三一
恩塚古墳　苅田町教育委員会　一九八四
山口南古墳群　苅田町教育委員会　一九八六
松山古墳群　苅田町教育委員会　一九九一
穴ケ葉山古墳群　大平村教育委員会　一九八五

郷土誌・歴史

国史大辞典　歴史学研究会　日本史研究会　東京大学出版会　一九九一
講座　日本史1　古代国家　岩波書店　一九八九、一九九〇
日本古典文学大系日本書紀　上・下　坂本太郎他校注　岩波書店　昭和五一年
続日本紀　一・二　青木和夫他校注　角川書店　昭和四五年
古代の日本1　要説　竹内理三編　角川書店　昭和六三年
古代の日本3　九州　鏡山　猛　田村圓澄　編　中央公論社　一九九三
古代の日本15　古代国家と日本　岸　俊男編　角川書店　一九九一
古代史総論　坪井　清足　平野邦雄　監修　山川出版社　昭和四七年
日本歴史大系1　原始・古代　井上光貞他編　名著出版　一九七八
福岡県史資料（第十輯）　伊東尾四郎編　東京大学出版会　一九七七・一九七八
日本古代史講義　笹山晴生著　岩波書店　一九九五
岩波歴史講座日本歴史　古代3・4　秋本吉郎校注　岩波書店　一九七九
風土記　米津三郎他共著　葦書房　昭和四三年
北九州の歴史　箭内健次編　吉川弘文館　平成六年
北・九州の歴史―縄文より明治維新まで―　田村圓澄著　吉川弘文館　昭和六〇年
飛鳥・白鳳仏教史　小田富士雄著　学生社
九州古代文化の形成　下巻

能満寺古墳群　大平村教育委員会　一九九四
垂水廃寺　新吉富村教育委員会　一九七六
天観寺山窯跡群　北九州市埋蔵文化財調査会　一九七七・一〇・一五
八雷古墳　行橋市教育委員会　一九八四
斑鳩藤ノ木古墳概報　奈良県立橿原考古学研究所　吉川弘文館　一九八九
城井遺跡群　犀川町教育委員会　一九九二
城井谷Ⅰ　築城町教育委員会　一九九二
幸木遺跡　豊津町教育委員会　一九七六
九州古瓦図録　九州歴史資料館　柏書房　一九八一
大和島庄石舞臺の巨石古墳　京都帝國大學文學部　一九三七
考古学學研究報告　第十四冊　濱田　耕作
老司古墳　福岡市教育委員会　一九八九
美夜古文化第18号　美夜古文化懇話会　一九六七
稲童古墳群第1次調査抄報　蔵内古文化研究所　一九六四
稲童古墳群第2次調査抄報　蔵内古文化研究所　一九六五
十双遺跡・赤幡森ケ坪遺跡・寒ノ神遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告(8)　福岡県教育委員会　一九九二

第三編　古代（奈良・平安時代）

福岡県の歴史　平野邦雄他　山川出版　昭和四九年
福岡県の歴史　箭内健次編　吉川弘文館　昭和四三年

福岡県の歴史　川添昭二他著　光文館　平成二年
日本歴史地図　柏書房　一九八二
日本の歴史　朝日新聞社　昭和六三年
福岡県百科事典　西日本新聞社　一九八三
郷土誌事典　福岡県　昌平社　一九八一
国史大辞典　吉川弘文館　平成五年
講座　日本史1　古代国家　東京大学出版会　一九八〇
日本古典文学大系日本書紀　上・下　岩波書店　一九九一
続日本紀　一・二　岩波書店　一九八九、一九九〇
古代の日本1　要説　角川書店　昭和五一年
古代の日本3　九州　角川書店　昭和四五年
古代の日本15　古代国家と日本　中央公論社　昭和六三年
古代史総論　角川書店　一九九三
日本歴史大系1　原始・古代　山川出版社　一九九一
福岡県史資料（第十輯）　名著出版　昭和四七年
日本古代史講義　東京大学出版会　一九七八
岩波歴史講座日本歴史　古代3・4　岩波書店　一九七七・一九七八
風土記　岩波書店　一九九五
北九州の歴史　秋本吉郎校注　葦書房　一九七九
北・九州の歴史―縄文より明治維新まで―　米津三郎他共著　吉川弘文館　昭和四三年
飛鳥・白鳳仏教史　箭内健次編　吉川弘文館　平成六年
九州古代文化の形成　下巻　田村圓澄著　学生社　昭和六〇年

九州考古学研究　歴史時代篇　小田富士雄著　学生社　昭和五八年
九州考古学研究　歴史時代各論篇　小田富士雄著　学生社　昭和五四年
太宰府探求　田村圓澄著　吉川弘文館　平成二年
西都太宰府　藤井　功　亀井明徳著　日本放送協会　昭和五二年
国府　藤岡謙二郎　吉川弘文館　昭和四九年
国府　その変遷を主にして　木下　良　教育社　一九八八
太宰管内志　中巻（復刻版）　伊藤常足篇　文献出版　平成元年
合本　美夜古文化　第1集　美夜古文化懇話会編　美夜古文化懇話会　昭和五〇年
合本　美夜古文化　第2集　美夜古文化懇話会編　美夜古文化懇話会　昭和五六年
和名類聚抄郡郷里駅名考證　池邊　彌著　吉川弘文館　昭和六三年
古代を考える　宮都発掘　坪井清足編　吉川弘文館　昭和六二年
郡司の研究　米田雄介著　法政大学出版局　一九七六
日本歴史地理総説　古代編　藤岡謙二郎編　吉川弘文館　昭和五〇年
史蹟　国分寺　樋口清之編　人物往来社　昭和四三年
特別展　国分寺　奈良国立博物館　昭和五五年
新視点日本の歴史3　古代編Ⅱ　吉村武彦他編　新人物往来社　平成五年
歴史新書34　古代の集落　石井則孝著　教育社　一九八七
帰化人　上田正昭著　中央公論社　昭和四〇年
帰化人と古代国家　平野邦雄著　吉川弘文館　平成五年
古代九州の新羅王国　泊　勝美著　新人物往来社　昭和四九年
歴史読本　渡来人は何をもたらしたか　吉成　勇編　新人物往来社　一九九四
日本古代共同体の研究　門脇禎二著　東京大学出版会　一九七五

条里制　落合重信著　吉川弘文館　昭和四七年
条里制の研究　渡辺久雄著　創元社　昭和五一年
古代史復元9　古代の都と村　金子裕之編　講談社　一九九一
地方文化の日本史2　古代文化と地方　門脇禎二編　文一総合出版　昭和五三年
鹿児島県の歴史　原口　虎雄　山川出版社　昭和四八年
宇佐　古代国家の成立と八幡信仰の背景　賀川光夫、藤田晴一著　木耳社　昭和五一年
古宮八幡宮と宇佐神宮の御神鏡　岡崎悠多楼編　御神鏡奉納保存会　昭和五三年
放生会の記録　松原一郎他編　宇佐神宮放生会保存会　昭和五三年
日本史小百科3　荘園　安田元久編　近藤出版社　昭和五二年
豊津町誌　豊津町誌編纂委員会編　豊津町　昭和六〇年
豊前市史　豊前市史編纂委員会編　豊前市　平成三年
北九州市史　古代・中世　北九州市史編纂委員会編　北九州市　平成四年
田川市史　上巻　田川市史編纂委員会編　田川市役所　昭和四九年
京都郡誌　伊東尾四郎編　京都郡役所　大正八年
甘木市　上巻　甘木市史編纂委員会　甘木市史編纂委員会　昭和五七年
椿市廃寺　文化財調査報告書　行橋市教育委員会　一九八〇
木山廃寺　文化財調査報告書　犀川町教育委員会　一九七五
幸木遺跡　文化財調査報告書　豊津町教育委員会　一九七六
竹並遺跡　竹並遺跡調査会編　東出版寧楽社　一九七九
豊前国府　第3・4・5・6・7・8・9・10　文化財調査報告書　豊津町教育委員会　一九八五―一九九三
宇佐市史　上・下巻　賀川光夫監修　宇佐市史刊行会　昭和五〇年
地名から探る豊前国遺跡　定村責二著　美夜古郷土史学校　昭和五〇年

古代末期の反乱　草賊と海賊　林　陸朗著　教育社　一九七七
新訂増補　国史大系（普及版）　黒板勝美編輯　吉川弘文館　平成四年
日本文化総合年表　市古貞次他編　岩波書店　一九九〇
史跡御所ケ谷神籠石保存管理計画策定報告書　行橋市教育委員会　一九九三
古代史復元8　古代の宮殿と寺院　町田　章　講談社　一九八九
古代史復元9　古代の都と村　金子　裕之　講談社　一九八九
官衙　考古学ライブラリー50　阿部　義平　ニュー・サイエンス社　一九八九
国分寺　日本の美術8　三輪　嘉六　至文堂　一九八〇
京都郡誌　伊東尾四郎　一九一九
豊前国京都・仲津・築城・上毛四郡における条里について　佐賀大学教育学部研究論文集第22集　日野　尚志　一九七四
豊前　新修国分寺の研究第五巻下　西海道　森貞　次郎　横田　義章　吉川弘文館　一九八七
九州古瓦図録　九州歴史資料館　柏書房　一九八一
豊前国庁址と瓦と　地域相研究第4号　前原平三郎　地域相研究会　一九七八
太宰府市史　考古資料編　太宰府市史編集委員会　太宰府市　一九九二
地方官衙の遺跡　日本歴史考古学を学ぶ(上)　山本　忠尚　有斐閣　一九八三
豊前地方の8世紀代の軒瓦について―上坂廃寺跡出土瓦を中心に―　九州考古学第59号　酒井　仁夫
発掘からみた大宰府　新版古代の日本③　九州・沖縄　高橋　章　九州考古学会　一九八四
西海道の官衙と集落　新版古代の日本③　九州・沖縄　石松　好雄　角川書店　一九九一
九州考古学研究　歴史時代編　松村　一良　角川書店　一九九一
官衙　考古学ライブラリー50　小田富士雄　学生社　一九七七
阿部　義平　ニュー・サイエンス社　一九八九

古代日本を発掘する4　大宰と多賀城　石松　好雄　桑原　滋郎　岩波書店　一九八五
古代日本を発掘する5　古代の役所　山中　敏史　佐藤　興治　岩波書店　一九八五
古代地方官衙遺跡の研究　塙書房　一九九四
国立歴史民俗博物館研究報告第10集　共同研究「古代の国府の研究」　国立歴史民俗博物館　第一法規出版　一九八六
近年における古代官道の研究成果について　国史学第145号　木下　良　一九九一
豊前国の郡家について　佐賀大学教育学部研究論文集第37集第1号　日野　尚志　一九八九
豊前国分寺史跡豊前国分寺跡　豊津町教育委員会　一九七五
幸木遺跡　豊津町教育委員会　一九九五
豊前国府　昭和59年度発掘調査概報　豊津町教育委員会　一九七六
豊前国府　昭和60年度発掘調査概報　豊津町教育委員会　一九八五
豊前国府　昭和61年度発掘調査概報　豊津町教育委員会　一九八六
北原遺跡　豊津町教育委員会　一九八七
豊前国府および正道遺跡　豊津町教育委員会　一九八八
豊前国府および節丸西遺跡　豊津町教育委員会　一九八九
豊前国府　平成二年度発掘調査概報　豊津町教育委員会　一九九〇
豊前国府および源左ェ門屋敷遺跡　豊津町教育委員会　一九九一
豊前国府　平成四年度発掘調査概報　豊津町教育委員会　一九九二
豊前国府　平成六年度発掘調査概報　豊津町教育委員会　一九九三
椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―1―谷遺跡Ⅲ地区　福岡県教育委員会　一九九五
苅田町教育委員会　一九八九
一九九一

黒添・法正寺地区遺跡群	苅田町教育委員会	一九八七
垂水廃寺	新吉富村教育委員会	一九七六
友枝瓦窯跡	大平村教育委員会	一九七六
菩提廃寺	勝山町教育委員会	一九八七
椿市廃寺	行橋市教育委員会	一九八〇
木山廃寺	犀川町教育委員会	一九七五
池ノ本遺跡Ⅱ	福岡県教育委員会	一九九三
筑後国府跡	久留米市教育委員会	一九九五
ヘボノ木遺跡	久留米市教育委員会	一九九五
十双遺跡・赤幡森ケ坪遺跡・寒ノ神遺跡　椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告(8)	福岡県教育委員会	一九九二
吉木遺跡	福岡県教育委員会	一九八九
大ノ瀬下大坪遺跡現地説明会資料	新吉富村教育委員会	一九九六
堂がへり窯跡群現地説明会資料	築城町教育委員会	一九九六
等覚寺の松会	苅田町・苅田町教育委員会	一九九三
鴻臚館跡Ⅰ発掘調査概報	福岡市教育委員会	一九九一
大宰府の文化財	九州歴史資料館	一九七四・三・三
小郡遺跡	小郡市教育委員会	一九八〇
吉野ケ里	佐賀県教育委員会　吉川弘文館	一九九四
谷遺跡調査報告書	苅田町教育委員会	一九九〇
荒堀雨久保遺跡	福岡県教育委員会	一九九二
豊津町誌	豊津町	一九八五

豊前市史　豊前市　一九九一
豊前市史考古資料別刷　豊前市　一九九三
日本歴史館　小学館　一九九三
日本の古代遺跡34　福岡県　保育社　一九八七
詳説日本史　渡辺　正気　山川出版社
県史シリーズ40　福岡県の歴史　平野　邦雄　飯田　久雄　山川出版社　一九七四
京都郡誌　伊東尾四郎　美夜古文化懇話会　一九七五・一一・三
犀川町誌　犀川町　一九九四・三・三一
日本考古学概説　小林　行雄　東京創元社　一九五一・一二・三〇
図解考古学辞典　水野　清一　東京創元社　一九五九・六・二〇
小林　行雄
日本古代遺跡事典　大塚初重・桜井清彦・鈴木公雄　吉川弘文館　一九九五・三・一〇
大分県史

第四編　中世（鎌倉・室町時代）

大内義隆　福尾猛市郎　吉川弘文館　一九五九
九州庄園の研究　工藤　敬一　塙書房　一九六九
増訂豊後大友氏の研究　渡辺　澄夫　第一法規出版　一九八一
南北朝期九州守護の研究　山口　隼正　文献出版　一九八九
豊前国における東国御家人宇都宮氏について　恵良　宏　九州史学24　一九六三
大内氏の豊前国支配　松岡　久人　広島大学文学部紀要23―2　一九六四

太宰管内志　伊藤　常足　歴史図書社　一九六九
築上郡史　上下　築上郡教育振興会　築上郡史編纂委員会　一九五六
豊前市史　豊前市　豊前市　一九九三
大分県史料　大分県史料刊行会　大分県教育委員会　一九五二～
増補訂正編年大友史料　田北学　田北学　一九六二～七九
福岡県資料　福岡県　名著出版　一九七一
太宰府天満宮史料　竹内　理三　太宰府天満宮文化研究所　一九六四～八六
蒙古襲来の研究　相田　二郎　吉川弘文館　一九八二
大分県郷土資料集成　垣本　言雄　大分県郷土資料刊行会　一九三六～三八
豊前志　渡辺　重春　二豊文献刊行会　一八九九
鎮西宇都宮氏の歴史　則松　弘明
大内義弘　松岡　久人　人物往来社　一九六六
今川了俊　川添　昭二　吉川弘文館　一九六四
中世九州の政治社会構造　山口　隼正　吉川弘文館　一九八三
九州南北朝戦乱　天本　孝志　葦書房　一九八二
筑前戦国史　吉永　正春　葦書房　一九七六
武藤少弐興亡史　渡辺　文吉　海鳥社　一九八九
九州中世史の研究　川添　昭二　吉川弘文館　一九八三
鎮西御家人の研究　瀬野精一郎　吉川弘文館　一九七五
北九州市詩　北九州市　北九州市史編さん委員会　一九八三
京都郡誌　伊東尾四郎　京都文化懇話会　一九七五
大分県史　大分県　大分県史編さん委員会　一九八〇～

第五編　近　世

日本史辞典	高柳光寿編	角川書店	昭和五九年
日本の近世3	藤井譲治編	中央公論社	一九九一
戦国武将の手紙を読む	二木　謙一	角川書店	平成三年
近世の村	木村　礎	教育社	一九八八
郡典私志	永尾正剛編	小倉藩政史研究会	昭和五三年
小倉藩の歴史ノート	米津　三郎	美夜古郷土史学校	昭和五二年
中原嘉左右日記	米津三郎編	西日本文化協会	
中村平左衛門日記	永尾正剛編	北九州市立歴史博物館	
北九州・縄文より明治維新まで	箭内　健次	吉川弘文館	昭和四三年
行橋市史	行橋市	行橋市	昭和五九年
犀川町誌	犀川町	犀川町	平成六年
豊前市史	豊前市	豊前市	平成三年
京都郡誌	伊東尾四郎	京都郡役所	大正七年
細川家史料一	東京大学史料編纂所	東京大学出版会	昭和四四年
幕藩体制確立期の諸問題	大阪歴史学会	吉川弘文館	
熊本県史料近世一	熊本県	熊本県	
福岡県史第3巻下冊	福岡県	福岡県	
藩貿易史の研究	武野　要子	ミネルヴァ書房	昭和四〇年
熊本大学史料叢書　藩主裁可文書一	熊本大学史料叢書刊行会	熊本大学史料叢書刊行会	昭和五四年
宇之島開港杉生十右衛門貞則	辛島　並明		平成二年

古文書参考図録　古文書解読指導研究会　柏書房　昭和五四年
切支丹史料集　対外史料宝鑑刊行会
日本巡察記　平凡社東洋文庫
宗門檀那請合之掟　渡辺文書
小倉市誌補遺　小倉市
松向公綿考輯録　松井文庫
日本切支丹宗門史　上
熊本県史　近世(1)　熊本県
クーケバックルの書簡
地方凡例録　巻三八
福岡県史資料五巻・三巻下　福岡県
御巡見方御尋之節御答覚書　永沼文書
豊前市史　上巻　豊前市
長井手永大庄屋日記　九州大学九州文化史研究施設
国作手永大庄屋日記　行橋市歴史資料館
差上申御受合証文之事　勢島文書・北九州市立歴史博物館
北九州部落解放史　資料七
職制　豊津高校
〈地方支配とその役人たち〉
禅源寺年代記　松井文庫
四日市村年代記
松向公綿考輯録

豊前小倉御侍帳	永青文庫
中津藩歴史と風土(4)	
小倉藩人畜改帳	
元和年中之御帳	永青文庫
文久二年戌秋冬六郡ゟ書上	友石文書
豊前国仲津郡寛永六同七同八三ケ年之御免帳	永青文庫
国作手永大庄屋日記	行橋市歴史資料館
長井手永大庄屋日記	九州大学九州文化史研究施設
斎藤系図	斎藤文書
中村平左衛門日記	豊津高校
職制	
〈飢饉と災害〉	
安武手永大庄屋日記	豊津町歴史民俗資料館
四日市村年代記	
福岡県史 資料三	
小倉巡見上使心得書	豊津高校
小倉開善寺保享印塔由来	
さいがわ六号	
北九州市史 近世	
禅源寺年代記	
国作手永大庄屋日記	行橋市歴史資料館
巡見上使様大村御泊一切控帳	永井文書・九州大学九州文化史研究施設

御巡見方御尋之節御答覚書　永沼文書
中村平左衛門日記
長井手永大庄屋日記
福岡県の歴史　九州大学九州文化史研究施設
福岡県立豊津高等学校七十年史　光文館刊
福岡県教育史　日本教育史資料　福岡県立豊津高等学校　昭和三三年一二月五日
福岡県教育委員会　昭和三二年三月三一日
龍吟成夢(上)　松井　斌一　小倉藩政史研究会原著者、松井斌一　平成六年二月二七日
京都郡誌　美夜古文化懇話会　昭和五〇年一一月三日
豊津町誌
日本教育史
大分県教育史
小笠原流礼法入門　小笠原忠統　中央文芸社　昭和五六年九月
小笠原流　小笠原清信　学生社　昭和四二年八月一〇日
小笠原礼書七冊・解説書　小笠原忠統　現代史資料センター出版会編者、小笠原忠統　昭和四八年九月三〇日
信州における小笠原　米津　三郎
峯高寺さん　村上　達亮　峯高寺　昭和六一年四月
豊前叢書第3巻第4巻　図書刊行会　昭和五六年五月三〇日
北九州市史
小倉市誌(上)(下)　小倉市役所　名著出版　昭和四七年九月二三日
小倉俳壇史私見　赤迫　雨湲
設立百十周年・京都医師会史　京都医師会史編纂委員会　社団法人・京都医師会　平成六年二月一四日
小笠原藩の奥羽出兵　友石孝之

合本美夜古文化　友石孝之　中央公論社
忘れられた九州人　宇都宮泰長　小学館
小倉藩維新史料　宇都宮泰長　集英社
鎌田英三郎戊辰日記　永尾正剛　吉川弘文館
小川七郎校訂　日本評論社
往来日記―小倉藩　羽川満編著　山川出版社
士小林槌太郎の戊辰戦争従軍日記　山川出版社
日本の歴史二〇　豊津町誌
体系日本歴史13
日本歴史⑯
近代日本の軌跡1
体系日本歴史5
体系日本歴史叢書3政治2
山口県の歴史
秋月党の侵入と豊津　古賀武夫
小倉市誌続編
甘木市史下巻
秋月党　川上秋舟著
中原嘉左右日記　米津三郎校注
旧秋月藩士豊津侵入戦争次第并手負賊討取捕縛人名御届　小笠原文庫一七六

秋月騒擾記事　福岡県史資料
九州文化論集4　西尾陽太郎
日本近代文化と九州
「士族の反乱」に関する問題点について　九州史学第四一号
九州と明治維新Ⅱ　九州近世史研究叢書13　国書刊行会
九州文化論集三　明治維新と九州　平凡社

豊津町史　上巻

平成九年四月一日発行

編　集　豊津町史編纂委員会

発　行　豊津町

〒824－01　福岡県京都郡豊津町大字豊津一一一八

電話（〇九三〇三三）三一一一

印刷　株式会社　きょうせい